IS(インフィニット・ストラトス）　天才の助手は不死鳥

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）　天才の助手は不死鳥

【Ｎコード】
Ｎ９６６０Ｚ

【作者名】
アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】
篠ノ之　束の助手を務め、世界中を渡り歩きＩＳ世界では、その首に途轍もない程の懸賞金を掛けられ世界中がその力を欲する程のＩＳを操り不死鳥という異名を持つ　鳳凰神　覇心
彼は束の指示でＩＳ学園に行く事となる

羽ばたく時を待つ不死鳥

「ではＳＨＲを始めますそれでは皆さん１年間宜しくお願いします」
「「「・・・」」」
先生が挨拶をするが皆無視
「え～っと・・・では自己紹介をお願いします・・・」
おいおい先生だいじょうぶかよ・・・涙目になってんじゃね～か・・・
ってか誰か助けてくれ！まわり一面女子女子！！んだこのカオスワールドは！？
誰か～！！ＨＥＬＰ～ＭＥ～！！！
「ではお次は・・・織斑　一夏君！」
「え？あっはい」
俺は席を立ち上がった
「え～っと・・・織斑　一夏、以上です」
ガタタッ！！っという音を立てて席から落ちる生徒が多数
・・・間違った事言った？嫌自己紹介だから本当の事言っただけ
がその時俺へのプレッシャーを感じたため軽く頭を横に傾けた
すると頭の横を出席簿が通過した！？ってか出席簿ですか！？
「お前はまともに自己紹介もできんのか？」
「・・・って言われても・・・俺の事情を良く知ってるのは貴女で

しょう・・・・？」
「・・・そうだったな・・・」

そう言って俺の姉　織斑　千冬は黒板の前まで戻って行った

「ここで皆に知らせる事がある、今織斑　一夏の３つ右の席
空白の席だが今そこに座る生徒が来た、入れ」

先生に言われては行ってきたのは身長が高く１８７程度の長身
赤と青、それぞれ違う色の瞳・・・確かオッドアイだったか？
なんかの病気とかでなるとかネットで見た事あるぞ
背中まであるかという長い銀色の髪
アルビノであってるかな？俺は雑学には少し自信あるけど在ってる
自信は無い
そして極め付けはその顔の無表情さ、すみません！そのクールさ２
ミリでいいんで
分けてください！！だけどかなりのイケメンだ、上、中、下っ表す
んだったら
特上か？いや上、中、下で表せてね～こういうのを絶世の美男子っ
て言うのか？

「挨拶をしろ」
「・・・鳳凰神　覇心・・・
年は１８・・・趣味、読書」

鳳凰神！？まさかと思うけど・・・心兄さん！？
嫌々無いか・・・心兄さん・・・俺を庇って・・・死んだはずだし・
・・
そして俺の疑問は晴れないままＨＲは終わった
そしてクラスの外からはまるで珍獣でも見るかの様に俺を見る女子

達がいる
勘弁してほしいな・・・
すると心兄ｓ・・・鳳凰神さんに近づく一人の女子がいた
金髪をの縦ロール？してる女子だ
俺は聞き耳を立てる

「ちょっとよろしくて？」

明らかに自分が上みたいな言い方だな
話しかける者としてその態度はどう～よ・・・

「・・・ミス・オルコット・・・何の要件で？」

あり？そんな受け答えすんの？

「あら、それ一応お話が出来そうですわね
では私もミスタ鳳凰神と呼ばせていただきますわ」

なんか・・・少し心を許したって言うのかな・・・？

「鳳凰神では長い・・・覇心か心で構わん・・・」
「私は会って間もない殿方を名前では呼びません事よ？」

でも一々鳳凰神言うのもどうかと・・・

「貴方は何故そこの織斑　一夏のように報道されなかったのですか？」

ああそういえばそうだな
俺と同じ男でＩＳを動かせるなら報道されても言いよう気するな

「俺がある人の元にいたからだ」

じゃあその人のお陰で騒がれなかったって事か？

「誰ですの？その人とやらは」

「・・・ＩＳの生みの親　篠ノ之　束・・・俺は彼女の助手だ」

えええええ！？あの人の助手！！？

「篠ノ之　束！！？今も行方知れずのＩＳの発明者！！？貴方がその助手というのですか！？」

「・・・真実だ、俺は彼女の助手兼専任コックだ」

何故に専任コック・・・

「本当ですの！？」

リンゴ大好きの死神？

すると鳳凰神さん・・・今度から神さんは鎌と髑髏で装飾された黒い指輪を見せた・・・カッコいいなアレ・・・

「それは？」

「俺の専用ｋ・・・そろそろチャイムが鳴る・・・

出席簿を喰らってもいいのなら続けるが・・・？」

「そ、それは嫌ですわ、ではまた後ほど、ミスター鳳凰神」

「・・・また・・・ミス・オルコット」

二人は別れ席に戻って行った、そして授業がスタートした

覇心サイド

授業は進みクラス代表を決めるはずだったんですが
女子が推薦したのは織斑　一夏と俺
そして俺は手を挙げた

「セシリア・オルコットを推薦する」

なぜかざわつく女子達、理由を言っておこう

「クラス代表はこのクラスを束ね、後の代表戦でも戦う
なら国家の代表候補生ならば強さも兼ね備えいる
ならば打ってつけであろう、どうせ男子が珍しいから俺達がやって
ほうが
面白いという下らん理由で推薦しているんだろう」

これを言うと女子が顔を背ける、図星か

「鳳凰神、言い分は正当な分があるが推薦を受けている以上辞退は
認められない」
「なら、勝負致しましょう！それならば私達との力の差がはっきり
と致しますわ
それで？ハンデは如何ほどにいたしますの？」
「あん？そんなのいらね～よ」
「俺も要らん」

すると教室内は笑いに包まれる

「ふ、二人共ほ、本当に言ってるの」
「男が女より強いって言うのは昔のお話だよ？」

「男が一度言ったことw「では聞くがＩＳ使えるから何故女が男より偉くなった」
ほ、鳳凰さん？」

俺はここにいる全員に対して言った
全員俺を見ている

「ＩＳを使える？だからどうした、この世に４６７のコアはあるがそのすべてが稼働している訳ではない、そしてＩＳの数も限られてる世界中の女性全員がＩＳを使える訳ではない、そして男と女その二つが戦争になった時
ＩＳを使える少数の女性陣は圧倒的な数に囲まれる・・・これでも偉ぶるつもりか？
所詮此所にいるのはアマチュアだけだ、俺にＩＳを使ってでも勝てる？
その自信が有るのなら決闘をしに来い」

すると笑っていた女子全員が静まりかえる

「では１週間後の放課後に代表決定戦を行う、それで文句はないな？」

そして授業は進んだ
放課後、俺は誰とも触れ合わずに山田先生から部屋番号を聞き
１２２７部屋に向かった、鍵を開け中に入った
部屋には誰も居らず部屋にいるのは俺一人
そして部屋の中央部にはダンボールが置いてあった
俺には誰からかは検討が着いていた、中を開けると紙が入っていた

『愛する束さんの贈り物ハート♪』

・・・やはり束からか・・・
見た限り俺の荷物を手当たり次第に送ってきたようだな
まあ勝手に弄られるよりはいい
俺はメールを打った

『荷物の郵送感謝する』

っと打って送信した
・・・何故彼女は俺を此所に送ったのだろうか・・・
すると携帯が鳴った
俺は携帯の通話ボタンを押した

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9660z/

IS(インフィニット・ストラトス)　天才の助手は不死鳥

2011年12月30日01時47分発行